

小規模コメ農家 ファン支える

西会津町は、独自に開発したアプリでコメ農家の安定収入を支えている。農家と消費者が直接売買できるほか、コメの購入や農作業のボランティアを通して得られる貢献度「石高」をためるとコメと交換できるデジタルチケットを受け取れる。卸売業者を介さないため昨今のような価格高騰の影響を受けにくく、関係者は「地域農業を守る新しいモデルケースになるのではないかと期待する」。



コメの育成について語り合う長橋さんと若橋さん。「新規の西会津のファンを増やしたい」と話す

西会津町、独自アプリ作成

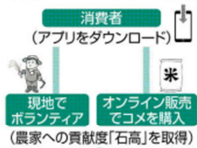
ながらコメの育成を見守る。年に2回、都内で農家と消費者の交流イベントも開かれており「顔の見える関係」を築いている。アプリ開発の背景には、農家の高齢化や減少が進む中山間地域の厳しい事情がある。別の高齢農家の稲作も手伝っているという登録農家の坂井康司さん(34)は「自分がやめると地域の農業が成り立たない。田んぼも一つ一つが小さく、作業に手間がかかる」と現状を語る。収入が天候に左右されやすいのも課題で、アプリ運用に携わる元地域おこし協力隊の長橋幸宏さん(33)は「農家が持続的に営農できる環境をつくる」ことが大切だ。消費者が現地で手伝う仕組みを取り入れることで、西会津の固定のファンを増やしていきたい」と歓迎する。

直接売買／お手伝いで交換「チケット」

▲ 9月2日 福島民友新聞掲載

「獲得が難しい新規の顧客を増やした。とても助かっている」。アプリに登録している農家の岩橋義平さん(72)は同町奥川地区にある田んぼで笑顔を見せた。岩橋さんは有機肥料や害虫予防効果のある竹酢をまくなど減農薬栽培にこだわり、小規模生産を出荷している。しかし、卸売業者に出荷すると「会津産」とひとくくりされ、手間が価格に反映されにくかった。アプリでは農家の細かい栽培方法も紹介しており、「こだわりが消費者に伝わり、納得しが、コメ作りの苦勞を共有

石高プロジェクトの概要



大の鶴田大作准教授は、前払いによる購入で生産者と消費者が相互に支え合う「CSA(地域支援型農業)」の取り組みに似ていると指摘する。アプリを使うことで若い人も関心を持ちやすいとし「今後の地域農業の在り方を考えるきっかけになるのではないかと注目している。(三沢誠)

地域農業を研究する鹿谷大の鶴田大作准教授は、前払いによる購入で生産者と消費者が相互に支え合う「CSA(地域支援型農業)」の取り組みに似ていると指摘する。アプリを使うことで若い人も関心を持ちやすいとし「今後の地域農業の在り方を考えるきっかけになるのではないかと注目している。(三沢誠)



石高プロジェクトとはどんなものですか。

アプリ開発の背景にある、農家の高齢化や中山間地域の厳しい事情とは具体的にどんなものですか。

今後の地域農業の在り方について、皆さんはどのようなことを考えましたか。考えをまとめてみましょう。